

# ASEAN+3「地域通貨単位」に関する一考察

赤羽 裕（亜細亜大学大学院 非常勤講師）

## 報告要旨

本報告は、ASEAN+3 でこれまで検討されてきた「地域通貨単位（＝RMU：Regional Monetary Unit, 以下 RMU という）」の内容を確認するとともに、その課題と展望を考察するものである。RMU は、ASEAN+3 におけるリサーチ・グループにおいてこれまで複数回取り上げられてきたテーマであり、その検討内容の確認と利用に関する展望を中心に報告する。

具体的なアプローチとしては、以下とした。ASEAN+3 のリサーチ・グループの研究などでも、RMU 自体の評価や導入への課題は多く論じられているが、各国通貨別のメリット・デメリットが個別に論じられるケースは多くないと考えている。一方で、域内各国が国別に RMU の創出・参加を検討する際には、自国のメリット・デメリットは大きな判断材料となるであろう。そこで、検討にあたり、現行の為替制度、経済状況・規模もふまえて、定性的な評価を筆者なりに行い、そうした視点での議論の「たたき台」を提示することを目指した。そのため、メリット・デメリットとも、一面的な評価に留まるものの、両面を検討することで、バランスの取れた議論へつなげることを考えた。合わせて、先行研究でも利用された「ゲーム理論」の発想を取り入れ、導入条件の考察を行った。

結果として、各国ごとの事情はあり、さまざまなメリット・デメリットが想定できた。しかし、絶対的にデメリットが大きい国は見当たらず、将来的な RMU の実現の可能性を否定するものではない印象を得た。「ゲーム理論」を使い、域内取引での外貨としての RMU の利用の選択肢を、域外通貨の米ドル使用と比較することを試みた。貿易等の経常取引と、今後も多額の資金ニーズが存在する域内インフラ整備資金に、RMU の利用を想定し、米ドルとの比較において、為替差損益に関する金額的な試算を目指すというアプローチ案を考えた。そのうえで、昨今の域内での資金ニーズに関わる案件もふまえて、RMU の位置づけと利用への展望をまとめたものである。

なお、本稿の内容・見解は個人的なものであり、本務先、その他いかなる組織とも無関係である。